

2013年 いろいろな思いを込めてラストさくら道

(2013年4月27日~4月28日)

山猫@滋賀

■はじめに

今年もさくら道に行く予定はしていたものの、スタートをどこにするかはあまり考えていなかった。3月に高速バスの時刻表を調べていると郡上で乗り継ぎすれば白川郷に行けるバスがあった。高速バスだが、荘川インターから先はさくら道のコースがバス路線となり、牧戸でも停車するので乗降でき、これは願ってもないコース設定ができる。「金沢ゆめのゆ」まで113km、今年になってスピードが上がっているの、かなりゆったりできるスケジュールだと思っていた。

ところが、3/23は快調にペースアップして走っていたのに、翌日走ると前日は何もなかったのに足が固まってしまような坐骨神経痛がいきなり出て、苦し紛れのランとなっていた。その日を境にして、痛みの中でのランを続けた。調子の良い日と悪い日があり、悪い日はかなりきつかった。その内に収まるだろうという楽観的な気持ちは持ちつつもストレスは溜まり、何とかさくら道の頃には引いてくれないかという気持ちだけは強くなっていた。

そして、4/15の夕方ランは走り出した直後から今までにない違和感があり、途中からあまりの痛みで走ることをさえできなくなっていた。さくら道まで10日あまり、間に合うだろうかという心配の中で、とり合えず距離を稼ぐためにウォークに切り替え、20日にはスポーツ鍼灸院で痛みだけ取ってもらうことをお願いした。少し軽くなったように思えたが、走って見ないとわからない。出発する27日まではできる限り負担を掛けないウォークに徹し、できるだけ身体の負担を減らした状態でスタートしたいと思っていた。

この時点で腹は決まっていた。走れるところまでは走って、痛みが出て走れなくなれば歩けば良い。しかし、牧戸スタートはどんなことをしても金沢まで行かなければならないことを意味していた。それなりの覚悟をしてのさくら道挑戦でもあった。

出発前日に金沢から京都までの特急券を購入。いつもは普通電車で帰るのだが、今回は贅沢にサンダーバードで帰ることにした。但し、荷物は金沢ゆめのゆには送らず、いざという時のために背負って走り歩きすることにした。

■当日

前日は夜中に目が覚めたりして十分な睡眠が取れなかった。5時半に起きて、6時前に家を出る。思ったより肌寒い朝だった。彦根の気温は7℃、思ったより気温は低い。米原で乗り換えする時にはかなり強い雨に変わっていた。しかし、米原からは浜松行きに乗り換えたが、朝早いというのに米原では乗車客が結構多かった。乗った浜松行きは特別快速という名の電車だった。JR西日本の関西では新快速、快速、普通という呼び名だが、JR東海の特別快速という電車がどういう意味合いか、どうでも良いことながら、自分にとっては分からずに困ったことだった。発車して5分ほどすると雨は上がり、雲の切れ目から日も差し始めていた。これで天気は大丈夫だろうとこの時は安心する。

米原から乗った学生と思われる若い女性3人組の会話が聞こえてきた。ひとりが「1時までバイトし、お父さんを迎えに行くことになり、車を1時間運転し、シャワーして寝たら3時だった」と話していた。米原の時刻は朝7時。しかも彼女らの会話から滋賀ではなく岐阜か愛知の住民のようで、時間と居住地が理解できず、どうでも良いことながら悩んでしまった。大垣からはどんどん乗客が増えてきた。アナウンスを聞いていると特別快速は岐阜までは各停で、以降は一宮と名古屋に停車する電車のようなのだ。

岐阜では高速バス発車まで約1時間の時間待ちがあった。すでに名古屋発に郡上で乗り換えできるよう予約してあるので気分は楽だ。郡上で乗り換えする「城下町プラザ」付近にはコンビニにもないので、岐阜駅前で昼食の牛丼と道中で食べるフランスパンとポテトチップスを買う。そして、バスが来る前にロングタイツ、長袖シャツという走るウェアになってバスに乗り込む準備をする。デイパックには金沢ゆめのゆでの着替え一式とウインドブレーカー、手袋、ライトくらいで、夜に気温がどんなに下がってもウインドブレーカーを重ね着するだけで十分だろうと安易に思っていた。

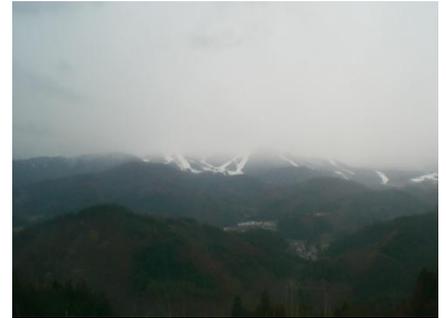
そして、8時53分に名鉄岐阜センター乗り場から「郡上白鳥」行きの高速バスに乗る。車内は過去乗った中では一番乗客数は多かった。3連休だからだろう。コーヒーを飲みながら、周りの景色を眺め、さくら道のコースを思い出し、過去のことを振り返る。トンネルが多いが、その合間にある新緑の木々の中に紫の藤の花があちこちで咲き乱れ、高貴な色・紫が鮮やかだった。郡上インターで高速から降りた後は各停となるので、市内巡回には時間が掛かった。いつからか分からないが、郡上ではエディオオンとケーズデンキがさくら道のコース上にできていた。

いつの間にか知らないうちに家電量販が出店していたのだ。

「城下町プラザ」に着いたのは数分遅れの10時10分頃だった。大きな施設のように思っていたら、土産物屋があるバス待合所といった感じの所だった。ここで名古屋からのバスの来る時間が迫っていたので冷めた牛丼をムシャ振った。雨が降っていないので良いが、雨だったら土産物屋の店内で雨宿りするしかないような場所だ。冷たい風が変わり、薄着の身体がどんどん冷えて行く。ここで痛み止めのロキソニンを飲む。効いて欲しい。白川郷行きのバスはなかなか到着せず、イライラし始める。同じく岐阜からひとりで乗って来られた若い女性も乗り換えバスが来ない上に寒いので気が気でない様子だった。結局、約20分遅れで到着。予約はしてあるが、2/3くらいしか席は埋まっていなかった。



再び、郡上インターから東海北陸道に上がったと思ったら、ワイパーが動き始めた。心配していたまさかだ。天気予報は雨ではなかったはず。小雨だったので何とかなるだろうと樂觀せずにはいられなかった。高速はどんどん標高が上がって行った。さくら道のコースだと郡上から蛭ヶ野までは650m余り上るので、そこまではいなくても相当上ることになる。山々より高速の方が標高は高く、先の方まで見通しが良い。大パノラマだ。そんな時、左側の山斜面に真っ白な春山スキーコースが見えた。「ダイナランドスキー場」だ。いつもは蛭ヶ野への上り途中に入り口前を通過するだけのダイナランドだが、遠くから見る風景はダイナミックだ。



「ひるがの高原スマートインター」付近では急に渋滞が起こった。何故と思っていたら、すぐに渋滞は解消。ここからは長い下りが続く、「荘川インター」で高速バスは一般道に降りる。インターを降りたところに道の駅「桜の郷荘川」があり、その中にバス停があるのでバスは寄った。この施設には日帰り温泉もある。ここには9年前の2004年に「さくら道同窓会」があった時に白鳥から蛭ヶ野を越えて、ここまで走って来た覚えがある。ここからはバスに乗って岐阜に向かってと記憶している。付近の気温は7℃を示していた。

一向に止む気配もない小雨降る中、4kmほど先の牧戸バス停に到着したのは約20分遅れの11時30分。当然、誰も降りる乗客はおらず、降りる時に変な目線を浴びせられているのを感じた。普通の人から見れば、雨の中で傘も差さず、しかも走るか歩くかのような格好で降車する客は、どう見ても普通ではないと思うのが普通の人目だろう。牧戸T字路はバス停から少し先だったので、そこまで歩く。

■ひとりさくら道スタート

牧戸バス停(スタート)

4月27日 11時32分

1年振りに自分の足で踏むさくら道、楽するために顕彰碑も蛭ヶ野も避けたことは心に重く押し掛かった。しかし、身体がこの状態なら仕方ないと思うしかなかった。走り出すといきなり坐骨神経痛が出た。バランスも崩れている。いきなり歩きとは、金沢まで歩かないといけないのか。そんな不安が頭を過ぎった。少し走った後、歩き続けた。



母衣ダム湖はいつ見下ろしても遺跡のうな雰囲気がある。「岩瀬1号トンネル」から「岩瀬3号トンネル」までは路面が粗く、水も落ちているので気を遣った。路面の粗さは腰に伝える。

ドライブイン「みぼろ湖」辺りまではバランスが悪いままの状態が続き、走ったり歩いたりを繰り返す。小雨は止



走れそうな感じになってきた。痛みのある右腰に負担が掛からないよう

みそうになく、雲行きが気になって仕方ない。左側には数軒のログハウスが建っているが、白い花を咲かせた水芭蕉が目に入る。鮮やかな白色が目にも留まる。ここからは若干のアップダウンがあるが、ここに来てようやく



きれいな路面を選び、ストライドを狭めてバランスを保つことのみを意識した。

「大サコ橋」を渡ると「莊川桜・200m」の看板が見え、その先には薄青色の「宮谷橋」も見えて来た。宮谷橋を渡ると「莊川桜」が目の前に。雨はまだカメラ撮影できる範囲だったので写真を撮るが、莊川桜はまだつぼみで例年通りだった。この頃はまだ薄っすら青空も見え始め、この先の天気回復に期待が高まる。道路の反対側から写真を撮ったりしていると警備員から厳しい声が飛んで来た。後で思ったのは良い莊川桜の写真を撮る



うとしたら、通り過ぎて道路の反対側から、「光輪寺桜」を手前にして「照蓮寺桜」を撮るのが一番良いアングルになるのではないかと思います。まだ開花は遠いので見物客はそんなに多くなかった。気温は7℃だが、体感には雲に覆われているので肌寒い。

警備員がいたのは莊川桜公園だけで、その先は影形もなかった。左の斜面に「御母衣電源神社」の階段があった。御母衣ダム建設の無事完成を見守ったのか、それとも完成後の平穩無事を願い建立されたのかは不明で、ダム建設を行った電源開発が建てた神社ではないか。この辺りは白樺の木も多く生えており、コバルトブルーの御母衣ダム湖と白樺はマッチするように思う。ほとんど雨らしい雨は降っていないので、このまま天気が続くことを願っていたが、雲行きは徐々に悪くなる。



そんな中、白鳥や郡上行きの大バスと名古屋方面行きの大バスに何台かすれ違った。この時、白川郷から郡上方面に戻るという選択肢があることに気付く。今回は金沢から京都への特急券を購入済みなので戻ることはできないが、白川郷ゴールも良いなあ～が頭の中を過ぎる。

そして「尾神橋」。御母衣ダム湖に掛かる橋の中では一番長いので、怖さもある。車が多い中で左右に行ったり



来たりして写真を撮る。ごまかしながらも快調に走れているので嬉しい。先のコースが見えるが、まだまだ御母衣ダムは遠い。白川村の「villages in japan」の看板が目止まる。前はなかったように思うが、結構良い感じだ。山の斜面からは残雪の中を透き通った雪解け水が勢い良く御母衣ダム湖に流れ落ちて行く。例年に比べると残雪は少ないようだ。



時たま通る大型トラックはかなりのスピードで走り抜けて行くが、路肩が狭いので怖い。荘川桜から30分ほど来た頃、「文化街道」の石碑がある付近では空はどんよりとした雲に覆われ、山も白く霞んで来た。同時に雨粒も大きくなり、路面が濡れ始める。時折、谷間を冷たい風が通ると非常に寒かった。



1106mの「福島保木トンネル」が見えると少しの間、雨を気にせずに進める。この福島保木トンネル、最初はカーブしているが、900m以上は直線で長く感じた。それにしてもトンネル内は温かい。トンネルを出ると肌寒さが増していた。御母衣ダムの上に来た時にはかなり大粒の雨に変わり、雨宿りしたくなるほどの雨だった。外でカメラを構えることはできないほどだった。「福島1号トンネル」「福島2号トンネル」を越えるとそのまま引き続いて新しい「福島3号トンネル」内に入って行く。白っぽいライトで見やすい。いつものことだが、トンネル内では勢い良く流れる大きな水の音が続く。

御母衣ダム(13.4km)

4月27日 13時07分



トンネルを出ると水溜まりができそうなやや強めの雨に変わっていたが、止まれば進めなくなるので形振り構わずに進む。気温は4℃まで下がっていて、確にかかなり肌寒い。真冬並みの気温だ。先ほどは青空もちらついていた御母衣ダム湖も下から眺めるとどんよりした空模様で、北の白川郷方面はもっと雲が掛かっている。このまま雨が続くかもしれないが、もう気にしても仕方ないと諦める。寒くてもウインドブレーカーを着れば確実に濡れる。もう重ね着する物を持ち合わせていないので、そのまま夜中突入すれば身体が冷え切ってしまう

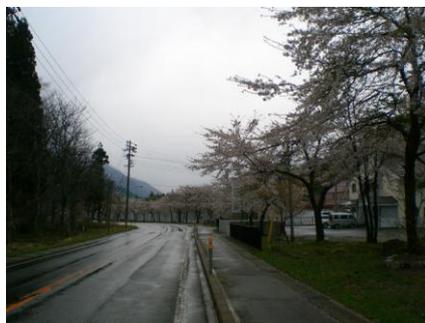
う。手袋をした方が良いが、軍手では濡れるともっと指先が冷えることを恐れた。結局、そのままの格好で進むしかなかった。

急なヘアピンカーブを下って行くとロックフィル式の御母衣ダムが迫ってくる。いつ見ても雄大で、且つ壮大だ。庄川のV字谷と雄大な白山にとってもマッチする光景だと思う。今下ってきた坂を見ると下りが如何にきついかを物語っている。S字カーブを出て長い下りを終えると牧集落だ。この雰囲気も何ともいえない風情がある。「御母衣旅館」前で写真を撮るが、改めて重厚さと落ち着きを感じさせてくれる旅館だ。殺伐としている中に、嫌なことを忘れさせてくれるような宿に思える。ここはこ



の時期、桜が切り始める頃で、桜並木には風情がある。右側だけではなく、左側にも桜並木があれば良いのになあ〜といつも感じる風景だ。

前方の緩い坂のところに遠山家が見え始めた。手前に「猿助」という合掌造りの食事処があるが、裏側の桜は満開で合掌造り民家とマッチする。夜の時もあったが、国の重要文化財「遠山家」だけは昼に通過することが多く、いつもしっかり見ることができる。裏に2戸ある小屋も合掌造りだ。見学者がいるのか、表の入口が開いていた。徐々に両足は強くなっていたが、まだ走れていた。御母衣ダムより気温は上がり、路面温度表示板は6℃と7℃を行き来していた。左に白山登山口の看板があったが、その下には「大白川露天



風呂」の表示もあった。「白水湖」のほとりに露天風呂があるようで、テレビで見たのを思い出す。

両足はかなり強くなっていて、写真もなかなか撮れないほどだ。周囲の山々の上の方はどこも薄っすら雪が残っていた。両足が強くなってから車の量は減ったように思う。旧道に入って行くY字路には「大白川の湯・平瀬温泉」のモニュメントが平瀬温泉の目印だ。夜は光り輝くが、昼はあまり目立ちにくい色だ。平瀬温泉は天気が天気だけに温泉客の姿もなく、地元の数人の人と出会ったくらいだった。いつもなら、足湯が軒先に3、4軒ある



のだが、今年はどこにもなく、あっても温泉の湯は空っぽ状態で、どうしてなのかと疑問に思った。

いつもエイドをして下さっていた「田口建設」はひと際目立つ立派な家だった。平瀬バス停のトイレに入り、わずかだけ休む。ここのトイレはきれいで休憩もできる。走り始めて20kmくらいで雨足は強まり、疲れも出てくる頃。疲れを感じたと思うと疲労は一気にやって来る。平瀬温泉の旧道から国道に合流するところの坂は結構上っているのので歩いた。車が通ると水しぶきを上げて走り過ぎて行く。「平瀬橋」を越え、国道156号線に戻る。

できるだけ水溜まりを避けて進むが、足元が気になってしょうがない。もう走ったり歩いたりになり始めていた。ゆっくり走ってはいたが、そろそろ時間的にも体力的にも疲れが出始める頃だ。「新平瀬トンネル」はライトが暗く、足元が全く見えないので、車を来た時のことを考えると走るしかなかった。トンネルを出た時は少し疲れていた。この先は緩いアップダウンが続く。



雨足は強くなる一方で路面には水溜りだらけだ。横を通る車の水しぶきが飛んで来る。天気良ければ、この付近は雪で覆われた白山が左前方に見えるのだが、今日は雨で雲の中だ。小さな水車と水舟のある「白川郷深山豆富店」の水舟は空っぽだった。この向かい側には自販機があるので栄養ドリンクを飲む。少し進むと帰雲城跡の看板が見え、その先に「帰雲城跡」が見えた。軽トラが置いてあって、こんな雨の中で誰かが看板を磨いていた。「シツカカ橋」の看板が見えると思わず立ち止まった。2008

年11月、雪の厳寒さくら道で寒さと暗闇の中で思わず目の前に現れたのがシツカカ橋の看板だったことを思い出す。

この先にはやや急で長い下りがある。そこを過ぎたところに「荒谷水力発電所」がある。山の斜面には大きなパイプが見えるが、パイプで水を山に上げて、それを横の水路に落とし、落差を利用して発電しているのではないと思う。雨足が強くて、もう撮影するにもカメラを取り出せない。この付近はダムが多く、発電所も多い。時々まわることもあるが、もうほとんど歩いていた。



外では写真が撮れないが、洞門からなら写真が撮れた。カーブの先に「野谷橋」が見える。ここから見える白山がさくら道で一番では近い。なのに何も見えないのは本当に残念だ。右側の林の向こうにある「鳩谷ダム湖」が時々見える。その先で長い下りがあり、ここは時々走ることができた。洞門を越えると橋が見えるが、凄い雨になっていた。水溜りを避けながら、必死で歩く。そして、「白川郷合掌集落」の石碑前のT字路を右に進み、合掌集落へと入って行く。

白川郷分岐「合掌集落」(29.6km) 4月27日 15時17分

分岐のT字路で車の誘導をしていた警備員に「天気予報と正反対で凄い雨ですね」というと若い警備員は「ホント参っています。気象予報士にクレームを言わないとダメですね」と返ってきた。その頭上を東海北陸道が走っているの、若干雨宿りする。合掌集落を前にして空を眺めても変わらぬ灰色の雲に寒さは一段と増す。こんな天気なので観光客はどうなのかなあ〜と思い、荻町の中心街に入ると傘を差した多くの観光客が目の前に。

合掌造り街のメインストリートはこの日で一番激しい雨で、ウインドブレーカーも手袋もしていない身体は寒さの限界に近かった。こんな時、「バスの駐車場に行きたいんですが？」と観光客に聞かれる。聞かれても回りを見渡す余裕もなかったが、庄川の向こう岸にあったのを思い出し、「来た道を戻らないとダメですね。戻って誰かに聞いてもらえませんか」と応える。国の重要文化財「和田家」の正面では雨宿りしながら写真を撮る。白川郷ではほとんどシャッターチャンスがなかった。

温かいラーメンが食べたくて、かつ食べたことのある「白川郷の湯」に寄るとこの時間、温泉はやっていなかったが、食事はやっていないとのこと。仕方なく付近の食事処に入ると暖房がよく効いていて極楽だった。メニューを見てもうどんか、そばしかなく、「ラーメンありますか?」と聞くと「作ろうと思えば作れますが」と言われ、そこまでして作って欲しいとは思わなかったので店を出る。食べるころはいっぱいあるが、ラーメン店がない。そんな時、空を見上げると雨は降り続けているが、厚く覆われた雲は切れ始め、間もなく止みそうな気配だった。

結局、その先の「白川橋」を渡ったところにあるいつもの「デリーヤマザキ」に寄る。おにぎりとカップラーメンを買い、寒い店外で食べる。本当は店内にいたい気分だ。16時前、ラーメンを食べている間、手はガタガタ振るえ続けた。寒さはピークに達していた。食べている最中に雨は上がり、青空が出て、陽が差し始めた。食べ終わると寒さを凌ぐためにウインドブレーカーと手袋を羽織る。長い雨だった。やっと安心できる、そんな心境になる。ここで2回目のロキソニンを飲むが、これは歩く方での痛み防止だ。

あれだけ激しかった雨が、いつの間にかあっけなく上がり晴れ始めた。まさにここは平地ではなく、山だ。逸れた旧道に入ると左に白い建物の「白川村役場」が見える。荻町の華やかさに比べると、ここには人もいず、寂しそうな雰囲気漂う。ただ、白川郷、荻町は白川村の一部であり、役場は白川村全体なので、これ



で良いのかもしれない。道の駅「白川郷」に寄って店内の風景を眺める。寒いのでストーブが嬉しい。外は雨上がりできれいな空気に覆われ、遠くの白山も見えて来た。陽は差しても気温は7°Cくらいで、まだまだ寒い。

道の駅を出て、左カーブを進むと突然「飯島トンネル(1873m)」が目の前に現れるのはいつものことだ。1000m級のトンネル群の始まりだ。白川郷のコンビニを過ぎた時点で、この先全て歩き通すという気持ちになっていた。逆には腰や足の心配はなくなった。しかし、下りでの歩きはきついことだろう。白川郷を越えてから、車の数は1/10くらいに減っていた。白川郷インターでバスはもとより、乗用車も高速に上がるからだろう。ひとりで金沢を目指す者には少ないことは有り難いことだ。

いつも通り、この時期の歩道は埃にトンネル上からの雪解け水が混じって、緩い部分が多く、しかも薄暗く、足を滑らせたら大変なことになるので対向車が分かる右側車線を進み、車のライトが目に入れば左側車線に移動するようにした。両方から車が来れば歩道に上がるしかない。歩道のぬかるみは右側の庄川側が酷いように思えた。飯島トンネルを出ると洞門が続き、いつの間にか「新内戸トンネル(1322m)」に入っている。このトンネルはどちらかというと雪解け水が少ないトンネルだが、今年は他のトンネルと変わらず、歩道はぬかるんでいた。



トンネルを出たところが「椿原橋」。赤の陸橋が鮮やかだ。昨年には新しい橋がほぼできていたが、まだ工事中ではあった。右側には「椿原ダム」が見えた。何度も通っているが、ダムに気付いたのは初めてのことだった。遠くには錆び付いたような古い橋が見える。春しか知らないが、秋のススキ舞う季節も良さそうだ。少し進んだところにバス停があったのでバス時刻を見て、自分の腕時計を見る。城端・福光方面行きの最終バスが通り過ぎてから、2時間近くも経っていた。もし間に合えば何て気持ちの隅にあったことも事実だ。

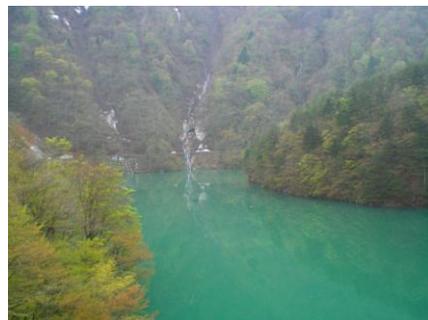


バス停を越えると長い坂が待っている。下り切ったところが小さな椿原集落だ。道端に満開の桜が咲いていたので、しばし眺める。そこを過ぎると少しの間、道幅が広がるが、その後は椿原第一洞門から椿原第六洞門まで、次々と洞門が続く。トンネルに比べて洞門は路面が斜めで、しかも道路端は粗い砂が寄り集まって歩きにくい。そして、「飛越峡合掌ライン」の表示板が頭上に見えた。庄川に流れ込む川を渡ると向こう側には旧の橋



が見えた。古い橋の方が風情を感じる。そういうものだろう。頭上はるか上を東海北陸道が走っている。

右にカーブした先には最後の「加須良トンネル(1038m)」が見えた。3つのトンネルの歩道はどれも同じくらいぬかるみ状態だった。車が来ないので安心して車道を進める。トンネル内は薄暗く、歩道のぬかるみ状態も見辛く、歩くにはとても危険だ。加須良トンネルを出たところに大きな吊り橋の「合掌大橋」が目の前に迫って来た。明るい時の合掌大橋はいつ以来だろうか？。合掌大橋上から眺めるとコバルトブルーが鮮やかで、ここは山肌の雪も点になっていた。



ここからは庄川に掛かる橋を渡る度に岐阜県と富山県が交互するが、庄川自体がS字型に蛇のように曲がって流れているからだ。橋の中央に石を積み上げた階段状の物があったが、飛越峡合掌ラインの完成祈念碑と公園のようだ。この合掌大橋から道の駅手前の楮橋までを「飛越七橋」と呼ぶそうで、この間が本来の「飛越峡合掌ライン」のようだ。この辺りは溪谷のような地形だ。右に「成出ダム」があった。これも関西電力のダムだ。地図を見ると送電線が多く走っているが、水力発電で起こされた電力が送電線を通じて送られているのが分かる。

その先には長い下り坂があり、下り終えると小白川の集落がある。気温は5℃から6℃くらいだ。18時半になる



とさすがに山、かなり寒い。上を見ると「聖光寺」の看板があり、ここには「聖徳太子像」もあるようだ。「小白川橋」を越えると路面はポコポコで粗い舗装になっており、走ると足に負担が掛かるところだ。車がほとんど通らないので気にせずに車道の一番路面の良いところを進む。「渚橋」を渡ると右側はダムになっていた。流れも速く水量豊富な庄川は水力発電に適しているのが分かる。もう薄暗くなっており、右には道の駅が見えて来た。

道の駅「上平ささら館」(47.1km) 4月27日 18時48分

まだ店は開いていたが、予約客だけのようだ。そろそろ夜のことを考えると何か食べないといけない時間だ。この先に店があるだろうと思い、トイレに入るとウォシュレットで気持ち良く大便ができた。無動作にデイパックを持った時、その下に置いていた軍手の片方を便器に落としてしまった。何ということだ。これから夜中を迎え、更に気温が下がるというのに片方の手袋がなくなるとは最悪だ。それも運命と思うしかない。

道路の端を歩いていると民宿の中から賑やかな声がしてきた。この辺りは日が暮れると何も無いが、その何も無い鄙びた田舎の良さを感じさせる声だった。「行徳寺」と「岩瀬家」を越えた時、中華料理「北の屋食堂」という看板が見えたので先に店がある保障はなく、ここで目の前の店に入るしかなかった。19時に入って見るとラーメンや中華丼、餃子などがある普通の食堂だった。メニューを見てチャーシューメンを頼んだ。我々くらいの夫婦が営んでいたが、見るからに愛想の悪そうな夫婦だった。出てきたチャーシューメンはこんなものだった。これから先の栄養補給にスープまで全て飲んだ。600円は妥当な値段だ。食堂やラーメン屋に入るとこの時期は必ずと言って良いほど野球が映っている。食い物屋の店主はみんな野球が好き何だろうかと思ってしまう。

民謡歩道の「新屋橋」を渡るとその先は長い上りが続く。「五箇山インター」の高架下では信号が赤だったが渡ろうとすると車が来たので思わずビックリして後退りする。夜になれば車は来ないという先入観は怖い。日中なら狭い歩道を通らなければならないところだが、夜だと堂々と車道を歩けることは安全で有り難い。

合掌造りの「青少年旅行村」、世界遺産「菅沼合掌集落」を越えてもまだ上りは続いた。上り終わると下りがあり、その少し先に旧上平村役場の南砺市「上平行政センター」が右にある。その反対の左側の建物の中は明々としており、春祭の稽古の最中で笛や太鼓の音が聞こえてきた。元気をもらえるような音色だった。「くろば温泉」はまだ営業中で車が10台ばかり駐車場にあった。

「小原ダム」を越えるとトンネルがあり、ここは「小原トンネル」というらしい。その先には熊肉と書かれた焼肉屋があった。熊狩りする人をマタギと呼ぶが、あれは北海道や東北の呼び方なのか？。この五箇山付近も熊は多いような感じがする。ふたつ目の民謡歩道「小原橋」を渡り、集落の間を進んで行くと大きなRの「湯出島橋」を下る。21時前だが、人影は全くない。

その先が上梨の「こきりこの里」だ。ここは小さいが観光地なので数人の人を見掛ける。「白山宮」は春祭前なのか、提灯が参道いっぱい吊り上げられていて明るくきれいだった。山深い地の提灯の灯りはとても力強いものだ。そこを過ぎると「上梨トンネル(1040m)」が待っており、このトンネルは非常に長く感じた。ここから下梨までは近いようで遠い。21時過ぎだが、山深い地なので車はほとんど通らないので静かなものだ。急がなくても良いけど、左手には手袋がないので1分でも早く進みたいと思う気持ちが強くなっていた。



下梨(57.8km) 4月27日 9時46分

これからが一番の難所となる。上りはいつも歩くので苦しさは分かっているが、五箇山トンネルを出てからの下りが果たして歩けるだろうか、それが心配だった。最初のカーブのところにある温度計は3℃を示し、冷たい風が通り過ぎて行く。かなり冷え込み、左手は腫れたように浮腫んでいた。このままだとどんな手になるのか、そんなことを思ってしまう。これから先、夜中は前に進むしかない。どんなことをしても森本までは辿り着かなければならない。そんなことを思うと憂鬱になる。車の往来が減多にないので、そこは安心だ。五箇山トンネル入口までは1時

間掛かる。

下梨から20分ほど歩けば、世界遺産「相倉合掌集落」の入口が左にあり、合掌造りをイメージしたバス停がある。ここでひと休みして、持参したベーコンチーズ入りのフランスパンをかじり、ポテトチップスを食べる。福光まで行けばコンビニがあるので、そこまでの辛坊だと自分自身に言い聞かす。

ただひたすら前に進みながら、何だかんだ思っても、この急坂を自分の足で上るのもこれが最後か、それだけだった。暗闇なので景色を刻むことができないが、心境は刻むことはできる。初めてさくら道ウルトラに出た2001年にはこの付近で名古屋のけんちゃんとかーさんがエイドして下さっていたことを思い出す。最後だと思うと今まで忘れていたことが、光陰矢の如しで思い浮かんでくるものだ。

はるか頭上に光が2つ見えるが、どちらの光が進む方向になるのか、何回通っても分からない。ヘアピンカーブが連続するので、自分の位置とその先が合わないのだろう。この右カーブを終えたら、きつい上りは終わり、トイレがあるはずと思っても、そこまで辿り着くとまた左カーブがあり、次の右カーブだったか、などと思いながら進むとやっと目の前の道路が広くなり、右にトイレの建物、先に梨谷トンネルが見えて来た。やっと急坂は終わった。やれやれだ。「梨谷トンネル(812m)」を越えると左に「たいらスキー場」の看板、真正面には谷底を見れば身が竦むような赤の欄干が鮮やかな「梨谷大橋」。端に寄るのが怖く、車も来ないので車道の真ん中を進む。

クチバシのような威圧的な形をした3072mある「五箇山トンネル」に入る。歩道ほどのトンネルも同じでトンネル上の雪解け水が流れ落ちてぬかるんでいるところが多い。気のせいかもしれないが、今年は特に多いように思えた。キロ10分で歩いて30分掛かるので、考えてみれば長い道中だ。五箇山の入りまでは車が少なかったのに、22時を回っているというのに今年の五箇山トンネルはいつになく車が多かった。多いといっても30台くらいか。車が来れば右に寄ったり、左に寄ったりして歩道にはできるだけ上がらないようにした。

トンネル内を歩きながら、このトンネルもこれが最後かと思うと感慨深くなってきた。何回目だろうか？。指折り数えるとさくら道12回で9回目になるようだ。9回の内、1回は岩瀬家の前から相倉合掌集落バス停まではバスで移動したが、五箇山トンネルだけは自分の足でと思った。2003年にはトンネル内で歩いていると羽根の寺澤さんに抜かれ、それに発憤して必死で走り、キロ6分くらいで追い掛けたこともあった。懐かしい気持ちともう長いトンネル内を進まなくても良いという安心感が交互する。

トンネルを出ると10%近い長い下りが続く。ここの路面はスピードが出ないように粗かったり、溝が刻まれたりしているので普通の下りより膝や腰、足への負担が大きい。トンネルを出てからは急に車が減り、路面の良い右側を進んだ。左下には城端と福光だろうか、都会のようなネオンの夜景ではないが、民家の暖かさを感じさせてくれる夜景が広がっていた。標高差があるので、結構きれいで飽きない景色だ。長い下りを歩くと足首を使わないことが逆に足首を疲れさせるように思える。

まだか、まだかと思いつつ、下りを歩き、近付く夜景に目をやりながら、ひたすら進む。下り切った頃には寒さで暖かいコーンスープが飲みたくてたまらなかった。最初に見つけた自販機には寄らず、その内にコーンスープもあるだろうと思っていたが、真冬ならともかく、今は春だったのでコーヒーばかり。しかもこの付近はコココーラがほとんど。元々コココーラはコーンスープがなかったと記憶している。

大鋸屋(72.3km)

4月27日 23時42分

いざ自販機を探そうとすると見つからず、見つかったとしてもアイスばかりとか、ホットがあってもコーヒーばかり。仕方なく缶コーヒーを買う。コーヒーは疲れていると吐くことが多いのであまり飲みたくないのだが、この際ホットでないと身体が冷えて持たない。小京都・城端は0時前になり、静まり返っていた。しかし、歩いている横で車が止まったりすると、そこはひとり旅、少し気持ち悪くなる。目に付いた自販機には全て寄ったが、飲みたいスープ類は皆無だった。

奥まったところにある茶色瓦の「城端別院善徳寺」の山門がぼんやりと見えた。「城端橋」を渡り、少し行くと城端線最終駅の「城端駅」が見える。本当に小さなローカル駅だ。頭の中にあるのは福光まで行けばコンビニがあるはず、それだけだった。以前は城端・福光町境にあったオアシスというべきファミリーマートがなくなり、白川郷から店がないのは辛いけど仕方ないこと。広い歩道を進み、東海北陸道の高架下を潜った先に「松島惣糸福光工場」があった。かつて、さくら道ウルトラが行われていた際にはエイドを開いて下さっていた。2003年のこと、たんだいさんと初めて口を利いた場所で、缶ビールを飲んでいて「ビールを飲むと眠たくなるので・・・」とビールは飲まれなかったことを思い出す。niftyのパソコン通信は96年から始めたが、当時からたんだいさんのことは知っていた。かつてはウルトラマラソン界のスーパースターだった、昔からネット上では知っていて、レスも何回もさせてもらったが、スーパースターたんだいさんだけに恐れ多くもという気持ちがあったことも事実だ。



道路と城端線が並行する場所になると歩道幅が狭く、凹凸がひどくなるので夜中でもあり、安全な車道の端を歩く。そんな時に限って車が以外と多かった。福光駅前で左折し、「坂上松華堂」前を過ぎたところが「福光橋」だ。本当は福光駅前を過ぎたところにローソンがあるとばかり思っていたが、その気配はなく、全くの思い過ごしだったことに気付く。いつもは右に逸れて波多さんの店に向かっていたが、今年は真夜中、そのままさくら道のコース通りに進む。もう波多さんの店に寄りたくても寄れなくなってしまうのかと思うと残念でならなかった。

時刻は1時半頃、福光の中心と思われる人気のない商店街を進んでいると後ろの方から話し声が聞こえて来た。「温かいラーメン食べたいなあ、ローソンへ行こうか」「行こう、行こう」学生のように店の前に立って食べるのも面白そうだ、そんな声だ。酔っ払いというほどでもないが、酔いを覚まそうとしていたのだろう。ローソンという言葉に反応したが、後ろにいたのは束の間で、いつの間にか声が聞こえなくなり、どこかで右折したみたいだった。そして、右前方のバイパス側にファミリーマートが見えた。ここは過去に寄ったことがあるので記憶にはあったが、逸れるのが面倒だったので、そのままコンビニはパスして金沢に向かうことにする。

この時点で森本ゴールは決まっていた。何も食べない訳にはいかないので自販機の前で座り込み、フランスパンとポテトチップスをかじる。もう少し行けば左に道の駅「なんと一福茶屋」がある。何台かの車が止まっていたが、寄っても何も無い。南砺市の「なんと」と福光の「福」を上手に掛け合わせた名称だと感心する。

ここを過ぎると真っ暗闇で何も無い田園地帯と集落が交互にある歩道を進むだけで、いつも滅入ってしまうところだ。右前方に「華山温泉」の看板が見え、その先の左には「川合田鉱泉」という温泉施設が目に入る。この先は田園地帯が続き、左カーブしたら「新蔵原トンネル」だ。初めてさくら道ウルトラに参加した2001年以降、「新蔵原トンネル」を夜に通るとカン高い声の女性が会話しているような響きがして、いつも寒気がするが、今年は特別よく聞こえたように思えた。全長がたった427mのトンネルながら、早くトンネルから出たくて、出たくてそんな心境になる。

トンネルを出た時に思い出したことがあった。2001年、トンネルを出るとその前に抜かして行った男性ランナーが若い2人の女性からコソコソと個人サポートを受けていたのを横から見て通り過ぎる。石川ナンバーの軽だったが、「コソコソ自分だけのサポートは辞めろ！」と言いたいような嫌な気分になったことを思い出す。いろいろあったなあ〜と感慨深い気分になる。暗闇の中だが、きれいな歩道が続く。手の浮腫はひどく、元々冷える右手には手袋をし、左手は素手のままなので浮腫方がひどく、グローブのような手にならなっていた。この付近から金沢はまだまだ先だ。この付近は数軒だけの集落もあり、それらを通り抜けるとまた集落がある。

昨年のことを思い出しているときちょうどバス停があった。昨年、一旦止めた「上砂子谷バス停」だ。懐かしいがそのまま通過する。その先には自販機があった。ここはいつも飲む自販機だ。緩い坂を下ったところに赤の欄干の橋があるはずだ。そこを越えると新道と旧道とに別れている。

かつて通っていた旧道はわかりにくくなり、外灯が明るくて目新しい新道にそのまま足が向いてしまう。しかし、そこは延々と続く上り坂。2006年、それぞれのさくら道、若穂井さんと一緒に進んだ時は初めてのコースに上り坂がどこまで続くのか、間違っただけではないかと思いつつ進んだことを思い出す。上り切って右にカーブすると富山・石川県境の看板が見えた。

富山・石川県境(89.9km)

4月28日

03時09分

気温も5℃を割っている感じで、手の浮腫はひどくなる一方だったのでデイパックからタオルを出して、それを手に巻き付けて、直接冷気が肌に当たらないようにする。今頃気付いても、どれだけ効果があるかわからないが、やらないよりやった方がマシではないかと思った。時々、大型トラックが通り過ぎて行くので、うっかり車道ばかり通っていたら危険だ。

新道は明るくて進みやすかった。旧道が交差するところを過ぎると左に大きくカーブしている。1年前、この付近は工事中だったが、今も少し工事の跡が残り、狭かった道路幅も広がっており、一部曲がっていた部分が真っ直ぐな道に変わっていた。ここを自分の足で通るのは2008年11月の厳寒さくら道以来で、実に4年半振りだった。バスでワープすることもあったので全く久しぶりとも言えないが、バスと疲れ切った自分の足、それも真っ黒な夜中に進むのとでは格段の差がある。

少し道路幅が広がったと思ったのも束の間で、その後は特に何も変わってはいなかった。長い下りが続く中をひたすら歩く。歩きの場合、下りが長過ぎると逆に足にくる。下りが終わると若干の上りがある。ずっと左側は川幅の狭い川が流れていた。山間から抜け出すと水田地帯に変わる。道もくねくねと曲がっていた。また下りが続く。時刻は3時49分、気温は3℃を示していた。薄着なので寒いのに変わりはないが、ここまで来たら寒さ加減がわからなくなっていた。

小さな清水谷の集落を越えると、その先はまた山の中に水田があるだけで、非常に寂しく、同じような場所に戻



っているような錯覚に陥るところだ。道もクネクネし、小刻みなアップダウンが続く。歩道は狭く、夜で車は減多に通らないのでずっと車道を歩いた。やっと家の建ち並びが見えて来て、少し先の交差点に縦文字で「古屋谷町」と表示があった。やっと古屋谷町まで来られた。県境からの5kmは長かった。

暗闇の中ではあるが、若干薄っすら明みを感じるようになった。待ち遠しかったY字路地点にあるローソンまではあと3.5kmほどある。寒いので温かい缶コーヒーを飲みながら、もう少し頑張れば温かい物が食べられ、そして今年のさくら道も終わられる、それしか頭になかった。ただひたすら、歩き疲れた足で先を目指す。この付近の歩道はいつもストレスを感じるのも車も走っていないこともあり、車道脇を進む。全然ストレスの具合が違う。単にコースだけではなく、金沢に入っていること自体が先を急がねばというストレスになっているのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、信号のあるY字路に「ローソン」が見えた。やっと温かい麺が食べられる。コンビニは白川郷以来で長かった。66kmの間、コース上にはなかったのだ。時刻は4時50分だった。店内は暖房されていた。食べたいラーメンがなかったので、どん兵衛の天ぷらそばを買う。湯を入れて外に積まれている折りたたみ式のパンケースの上に座って時間を掛けて食べる。疲れているので美味しいのか良くわからなかったが、元気になれたことだけは事実だった。

コンビニ左側の道路幅の広い正規コースを進む。道路は広いので、車道脇を進んでも車が少なく、問題なかった。その先で道路は狭くなり、あと1kmほどで森本に付ける。明るくなって散歩や自転車の人が少し増え出した頃の5時33分に「森本」交差点通過。左折して200m先の左前方頭上に「森本駅」が見えた。2008年11月、雪の厳寒さくら道の時は正反対の16時前だった。

森本駅(100.9km)

4月28日 05時35分

森本駅は場所が狭いため、改札は上にあり、一旦上って切符を買い、改札口を出るとまたホームに下らないといけな。エレベーターはあるが、乗り降りが不便な駅舎だ。時刻表を見ると始発が6時20分となっていた



ので、まだだいぶ時間があつた。金沢まで2駅だが、北陸本線は本数が少なくて滋賀と言えども関西圏に住んでいると不便さを感じる。電車が来るまでホーム上の仕切られた部屋で休憩。まだ駅員はいないので部屋は暖房されていて室内は快適そのもの。残っていたフランスパンと温かい缶コーヒーでささやかなモーニング。この時にグローブのように浮腫んだ手の写真を撮る。自分の手とは思えないほど気持ち悪かった。電車が来ると数人の乗客が乗り込んだ。



8分後には金沢に到着。歩く時間が掛かるのでバスに乗ろうと駅から歩いて大通りに出るが、休日の朝6時半過ぎに路線バスはまだ走っていなかった。今まで歩いてきたのだから、「金沢ゆめのゆ」まで約3.5km歩かない。天気は良かったので、ぼつぼつ歩いている内に到着。何度も来ているので慣れたものだ。

■金沢ゆめのゆ、そして帰路

到着時間は7時30分だった。午後のサンダーバードで帰るので12時頃には出たいと思っているので仮眠はできないかもしれないが、ちょうど良い時間だ。本来なら入館料は1050円だが、HPにあった割引券持参なので700円で入れた。350円引きは大きい。今回は最小限の荷物だけに留めて、全て背負って金沢まで来たので、送られて来た荷物もない。荷物が少ないということは楽だ。まずは雨に叩きつけられ、汗とホコリで汚れた身体を温泉に浸かって休ませた。何回か来ているので慣れたものだ。ただ、歩き続けた分、足は結構ロボットのようになっていた。

風呂から上がると朝食だ。メニューが変わっており、食べたい物がなかった。以前はもっとメニューがあつたはずだ。節約のためにカツカレーと生ビールでひとり乾杯。いつもは3Fで足を伸ばして仮眠するのだが、昼間なので眠れそうになく、1Fのリクライニングの休憩室で横になったが、ウツラウツラする程度だった。

わずかに眠っただけだったが、14時頃のサンダーバードに乗りたかったので、12時20分に「金沢ゆめのゆ」を後にした。中にいた時間は5時間弱だった。歩いて「藤江」バス停に向かう。路線バスは間もなくやってきた。JR高架手前の「中橋」バス停で降りる。バス代は210円だった。ここから歩いていつも通り、金沢駅に向かう。

金沢駅構内の「吉野家」で牛焼肉丼を食べようとしたが、ここでは牛丼しかやっていなかった。牛丼大盛りを注文。土産物屋をブラブラして、それでも時間がたっぷりあつたので、駅のホームで缶ビールとつまみを買って待つことにした。

そして、13時56分のサンダーバードで京都に向かう。いつもは普通電車を乗り継いで帰るのだが、今回は荷物やその他で始末したので、少し贅沢させてもらった。行く前はこれが最後になるとは頭の片隅にもなかったのに、いつの間にかラストさくら道になっていたの、最後のご褒美ともいえる。サンダーバードは快適で約2時間10分後の16時09分に京都へ到着。敦賀からは京都までは近そうで遠い。それだけの距離があるのだが、毎回のことながら、どうもそう思えないところがある。家には17時頃に着けた。

■12回目のさくら道を終えて

2004年4月末、大阪・梅田の映画館で映画「さくら」を見て感動のあまり涙が止まらなかった。「さくら道270kmウルトラマラソン」のことを知ったのは1999年4月、パソコン通信 nifty のフォーラム・FWELL だった。あの頃、さくら道の王者はたんだいさんで、女王は加村さんだった。たんだいさんのさくら道のゴールは FWELL でも書き込まれたので憧れ、いつか270kmに挑戦したいと強く思うようになった。そして、走れるように努力した。

2001年にそれが実現したが、初めてのさくら道は信じられないほどの苦しみとの闘いだったが、ゴールできた時の感動は素晴らしかった。苦痛の先にある素晴らしいものは味わった者でないとわからないことを実感した。その後2年間、さくら道を走らせてもらえたが、2003年で一旦さくら道ウルトラは膜を閉じた。

あれから12年の歳月が流れ、私も12歳年を食ってしまった。2005年を除いて形は変われど、ひとりでさくら道に挑戦し続けたが、年々ゴールは遠ざかるばかりだった。初めてのさくら道ほどの体力も気力もなくなっているのも事実だったが、それを受け入れられない自分の姿もあった。

2013年4月のひとりさくら道は今まで受け入れられなかったさくら道での限界を教えてくれたさくら道でもあった。もう良いだろう、もう十分だと自分に言い聞かせ、納得した。いろいろな意味で自分を強くしてくれ、前に進む力を与えてくれたさくら道。2001年夜中の金沢市内、起きているのか寝ているのか、進んでいるのか止まっているのかわからない自分があった。

あの時味わったものは自分の糧になったように見え、可能とは何かを考えるようになった。さくら道があったからこそ、前に進めなくなりつつも挑戦する気持ちを持ち続けられ、その結果がもたらしてくれたものの大きさは計り知れなく、何とんでも私自身も少し強くなれたと実感できたことが大きな喜びであった。

ありがとうさくら道、ありがとう佐藤良二さん。心のさくら道は永遠だ。

太平洋と日本海を桜でつなごう

